サポートツール全国キャラバン2012「教材教具研修会」in 長崎

発達障害がある子ども一人ひとりのニーズに応じた指導・支援の具体的方法

研修会報告書

2013 年 2 月 11 日

長崎県立こども医療福祉センター　講堂

主催：特定非営利活動法人　全国LD親の会

共催：長崎発達支援親の会「のこのこ」

【研修会開催趣旨】

「障害者の権利に関する条約」への批准に向けた国の取組みの中で、平成２３年７月、障害者基本法改正案が可決され、平成２４年７月には「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」の中で「障害のある子どもと無い子どもが、できるだけ同じ場で共に学ぶことを目指すべきである」という提言がなされた。「共生社会」とは、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会であり、その形成に向けたインクルーシブ教育システム構築が求められている。

２００７年４月、学校教育法が改正され、特別支援教育の推進が図られてきた。全国ＬＤ親の会では、２００６年度から２年間にわたり、文部科学省から「障害のある子どもへの対応におけるＮＰＯ等を活用した実践研究事業」の委嘱をうけ、「ＬＤ、ＡＤＨＤ、高機能自閉症等の発達障害向けの教材・教具の実証研究」を日本発達障害ネットワーク（ＪＤＤネット）の加盟団体等と共同で行い、学校や療育機関での先行事例・有効事例、家庭での工夫等による教材・教具のアイデア、事例を収集して、ＬＤ、ＡＤＨＤ、高機能自閉症等の発達障害のある子どもの困難やニーズに合わせた有効なサポートツール（教材・教具など）を体系的に整理し、発達障害児のためのサポートツール・データベース（教材・教具ＤＢ）

http://www.jpald.net/research/index.html

を作成した。

さらに、２００９年度からは、日本財団の助成を受けて、発達障害児のためのサポートツール・データベース（教材・教具ＤＢ）を質、量とも充実させ、普及させるための事業に取り組み、今年度からは、共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築を目指して、特別支援教育の推進によって蓄積されてきたノウハウの汎用化・ユニバーサルデザイン化・様々な障害の状態に応じた支援機器の充実を図った「発達障害児のためのサポートツールの個別の使い方とユニバーサルデザイン化」事業に取り組んでいる。

ユニバーサルデザイン化には、一人一人のニーズを把握するパーソナル化の視点が不可欠であり、各地で研修会を開催して「インクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の視点」について考えていく。開催準備や開催後の連携を視野に入れて、全国ＬＤ親の会加盟の開催地域の親の会を中心に、特別支援教育士資格認定協会Ｓ．Ｅ．Ｎ．Ｓの会各支部会・各都道府県作業療法士会と連携を図って進めていく予定であり、今年度は東京都江東区と長崎県諫早市で開催する。

【研修会開催要項】

日　時：２０１３年2月１１日（月・祝）１０：００～１６：３０（受付９：４０～）

会　場：長崎県立こども医療福祉センター　講堂
　　長崎県諫早市永昌東町２４－３

プログラム

１、講演１　「発達障害のある子どもの特性に沿ったサポートと教材の活用」
　　～使い方で変わる教材の有効性～

講師　山田　充　氏
（特別支援教育士スーパーバイザー・自閉症スペクトラム支援士アドバンス・
堺市立日置荘小学校通級指導教室教諭・堺市特別支援教育専門家チーム・
堺市特別支援教育推進リーダー育成研修推進委員）

２、講演２　「発達障害のある子どもの感覚運動機能に応じた教材教具の工夫」

講師　嶋谷　和之　氏
（日本感覚統合学会テストメカニクスインストラクター・
大阪市更生療育センター作業療法士・大阪府作業療法士会発達部門副代表）

３、ワークショップ
「子どものテスト等や、ビデオによる事例検討の手法ワーク」

主 催 ： 特定非営利活動法人全国ＬＤ親の会

共 催 ： 長崎発達支援親の会「のこのこ」

後 援 ： 長崎県教育委員会、一般社団法人日本ＬＤ学会、
一般社団法人日本作業療法士協会、一般社団法人長崎県作業療法士会、
日本感覚統合学会

事務局 ： 〒151-0053　東京都渋谷区代々木 2-26-5 バロール代々木 415
TEL/FAX ： 03-6276-8985　　E-MAIL ： jimukyoku@jpald.net
URL ： http://www.jpald.net/

講演１　報告

「発達障害のある子どもの特性に沿ったサポートと教材の活用
～使い方で変わる教材の有効性～」

報告者：山田　充（特別支援教育士スーパーバイザー）

講演は、具体的な子どもの姿とその子どものもつトラブルを紹介しながら、その要因が思いもよらない原因で起こっていることを説明することから入っていった。そのことに対応しないと二次障害となる。学校現場などで問題行動を起こす子どもたちの多くは、学習困難への支援がしてもらえず、そこから問題行動に発展する二次障害であることが多い。二次障害というものがあると言うことを強調しながら話を進めた。

学習困難の要因を探る体験のために、子どもの算数のテスト問題などを提示し、誤りの要因をきちんと考えていき本人の特性と結びつけることで、学習支援の具体的な方法を見つけることが出来ることを紹介した。分析の方法についても、少し紹介しながら進めた。

このように子どもの様子を紹介する事例ベースで、講演をすすめ、その事例の子どもへの対応を紹介する中で、実際に使用している教材（データベースで紹介されている物も含めて）のコンセプトを紹介するとともに具体的な使用方法について説明していった。

次の支援方法を障害特性ごとにまとめて説明した。ＬＤ状態への対応は認知への支援、ADHD 傾向への支援は集中への支援、広汎性発達障害傾向の子どもたちには、その特性の理解と特性に沿った道筋の支援が必要であることを紹介した。

２時間に及ぶ講演であったが、参加者はとても熱心に聞いて下さり、たくさんの有り難い感想を頂いた。感想の中で特徴的なことは、子どもの様子を思い浮かべながら聞いていただく方が多数おられたことと、子どもの様子や行動を分析することの重要さを認識した、教材もたくさん知ることが出来た、また今後実践してみたいというような積極的な感想を多数いただいた。

講演２　報告

「発達障害のある子どもの感覚運動機能に応じた教材教具の工夫」

嶋谷　和之　日本感覚統合学会テストメカニクスインストラクター
大阪市更生療育センター　作業療法士
（社）大阪府作業療法士会　事業部発達部門副代表

ねらい

普段私たちは、何気なく姿勢を保ち、運動を行い、手を使って物や道具を扱っているが、これらはほとんど意識されることなく自動的に行っていることが多い。そのため、感覚運動機能を背景的な要因とする子どもの困難に気づきにくい、分析しにくいという場合も少なくない。

今回の研修のねらいは、以下の２点である。

・普段何気なく行っている活動を意識化し子どもの困難と重ね合わせることで、子どもを理解し手立てにつなげるきっかけとする。

・すぐにできる物や道具の工夫で、子どもの活動がより行いやすくなることを知っていただく。

また、感覚運動機能の観点からの子どもの見方を説明し、後で行う事例分析のワークにつなげることも目的とした。

内容

①作業療法士の視点について説明を行った。

②感覚運動機能について、以下の２点についてより具体的に説明した。

・安定した姿勢が保証されて、効率よく手を使い物や道具を操作できることを説明した。

・感覚情報は食物と同じように、人間が生きていく上で必要な栄養素であると捉えることも可能である。子どもに必要な感覚情報を、日常生活の中に溶け込むように提供していくという視点を説明した。

③大阪府作業療法士会パンフレット「発達障がいのある児童・生徒への学習および学校生活援助」から、「よくある相談」のいくつかを紹介し、困難の要因と手立ての例を説明した。

紹介した「よくある相談」は、以下のとおりである。

・姿勢の保持が難しい

・筆圧が強すぎる、弱すぎる

・食べこぼしが多い（箸がうまく使えない）

・はさみ、定規、コンパスがうまく使えない

・なわとびができない

④事例を通して子どもの困難、背景的な要因、手立てを具体的に説明した。

・姿勢の保持に困難のある事例。低緊張に加えて、自分の身体の状態を把握しづらいことが背景的な要因。滑り止めシートを座面に敷くと臀部の前ずれは改善するも、左右への崩れに対しては改善が認めにくくハートリーフクッションが必要と考えられた。

・椅子を動かすことが多く、座面の縁で座りたがる事例。圧や運動感覚の欲求が高いことが背景的な要因。感覚の欲求を満たすことができるよう座面にクッションを付けると安定して座ることができ、授業をより集中して受けることができた。

・鉛筆がうまく持てず書き続けると疲れる事例。手指の巧緻性の未熟さと触覚の分かりにくさのために、三指では細い鉛筆をしっかり持つことができず、代償的に四指で力を入れて持ってい

ることが背景的な要因。三角の鉛筆グリップを付けることで、鉛筆との接点が増え、鉛筆を捉えやすくなった結果、三指で鉛筆を持つことが可能となり疲れずに書くことが可能となった。

・指先で箸を操作できずクロス箸になり、何度もつまみ直しをしている事例。手指の巧緻性の未熟さが背景的な要因。子どもに応じた補助具をつけることで、指先で箸を操作してつまむことができるようになった。

⑤子どもが努力して物や道具の操作を行っている場合、出やすい運動のサインを説明した。このような反応を捉えることで、子どもの努力を認めることができること、過剰な負担をかけることがないような工夫や細かな段階付けにつながっていくことを説明した。

⑥教材教具を展示した。ちょっとした工夫で活動がより行いやすくなることを体験していただいた。

【展示物】

・ハートリーフクッション
・滑り止めシート
・滑り止めを貼った定規、分度器
・市販の滑り止め加工された定規、分度器
・紙の下に滑り止めシートを敷くことで、コンパスが操作しやすくなる工夫例
・市販の操作しやすいコンパス
・滑り止め加工した三角鉛筆
・太い三角鉛筆、色鉛筆
・各種の鉛筆グリップ
・消えやすい消しゴム
・工夫を施した箸
・バネ付きのはさみ
・工夫したとび縄
・大阪府作業療法士会パンフレット「発達障がいのある児童・生徒への学習および学校生活援助」
・感覚統合関連の書籍

⑦物や道具の操作、ダンスなど身体をうまく動かすことに困難さのある児童を分析する上で参考となるような視点を配布資料に盛り込み、ワークの事例を検討するための参考資料とした。

参加していただいた方のアンケートを見ると、感覚運動の観点からの支援の必要性に気づかれたり、再認識されたりしたように思う。また、「なぜ」という視点で困難の背景を検討していくことの重要性、感覚運動の特性に応じた環境調整の重要性など、講演内容の重要なポイントがアンケートに書かれてあり、ご理解をいただけたのではないかと思う。子どもの理解と支援にあたっては、いろいろな視点で多角的に捉える必要があると考える。作業療法の視点が子どもの理解と支援に役立つことができれば幸いである。

ワークショップ　報告

● ワークショップ プログラム

14：15～14：20　ワークショップ進行説明・グループ内役割分担（山田講師）
14：20～14：25　ケーススタディー対象児 ビデオ上映
14：25～14：50　ビデオ・資料を基に グループごとに子どもの特徴、抱えて入る問題点を検討。
可能性や、支援方法を考える。
14：50～15：10　各グループ発表
15：10～15：45　各講師より総評。
違った見方・さらに考えられる支援方法などうかがう。
15：45～16：10　質疑応答

● ケーススタディー対象児　小学２年生男子　特別支援学級在籍

● グループ発表　内容

〈　特徴・問題点・支援の方法　〉

・ 縄跳びの飛びかた、ダンスの様子などから、体全体、また体の末端の使い方が不器用。
・ 体力がない。
・ ボディーイメージがはっきりとつかめていない。
・ 繊細な動きが苦手。
・ 複雑な運動を行なう前には、予備運動・準備運動をさせる。
・ 姿勢の維持が難しい
・ 筋緊張が低い
⇒ 体全体を使う運動や、重いものを持つ運動などして、傾き・バランス・体軸か感じられるようにしていく。筋力を高める。
・ 保護者の記述より、対人関係の問題は少ない。
・ ダンスが周りの動きに合っていない　→　周りを目で見て動いている。
目からの情報には強いが、体の使い方が下手。
リズムに乗れていない。
途中、気がそれている様子。
・ 漢字の書き取りの様子やテストから →　指先・手の使い方がぎこちない。
丁寧さが欠けるが、最後まで投げ出さない。
だんだん雑になるのが顕著なので「ゆっくり書こうね」と声かけをする。
画数が多い漢字は特にますから飛び出ているので、大きいますを使って練習させたほうがいいのでは。
ひじを置いたまま動かさずに字を書いているので、ノートやテストの下のほうは書きにくそうな字になっている。
サポートツールを活用して、鉛筆を持ちやすい工夫をしてみる。

・ 数学・漢字のテストの点数が取れているので、知的な遅れは余りなさそう。暗記は得意。
・ 俺ルールが強い。
・ 運動会で綱引きに参加でいない→　綱引きのルールがわかってない。
太い綱がしっかりとつかめないのでは。
・ 縄跳びが苦手。保護者の記述、様子より　→両足同時に飛べていない。よろける。
一定のリズムを保つのが難しい。手が伸びたまま縄をまわしている。

・　片づけが苦手　→　空間認知の苦手さ。
・　絵は顔だけ、体なし。
・　朝の様子の絵日記より、家族４人の顔を描いて塗りつぶしている。
→　できないことを努力でなんとかよくがんばっている。
ストレスがたまっていないか。

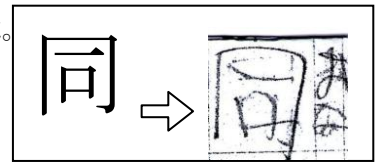
●　講師の見解・アドバイス

〈 山田　充　講師 〉

・　すべての問題に、１つ１つ丁寧に対処していく必要がある。
・　漢字のテストより。 右側の字は右下がりに、左側の字は左下がり気味になっていることから、ひじを固定したままワイパーのように字を書いているのでは。
→　書く場所に合わせて「手も動かす、紙も動かす」事を教える。いつもベストポジションで書くよう声かけ
・　筆圧の低さ→　指のコントロールの練習…マス目に渦巻きを書く
サポートルールの活用…書くと光るペンで光らせたまま描き続ける
鉛筆を３本の指でしっかり持つ工夫
・　メタ認知の低さから行動を客観的に見られないので、自分で行動の不器用さに気付きにくい。
→　人がどう思っているか、教える
時には、友だちの口を借りて言ってもらう
本人が気にして 質問をするようになると、もっとわかりやすくなっていく
・　一番苦手なのは、２つの事を同時にやる事。
例えば、消しゴムで字を消すのは「紙を押える力」と「消しゴムでこする力」のバランスを取る　など
・　２つの事を一度にする練習を、普段から意識してする
→　例えば　音読をさせて後で内容を聞く……　読みながら内容を覚える練習
・　継次処理も苦手だが、同時処理も苦手。
考え癖は簡単に直らないので、方法・方略を教えたほうが、簡単なこともある。
→　体をふくと拭き残しがある……　体を拭く順番を決めて掲示をする。
毎回決めたとおりの順序で体をふくようにする。
・　ベーストレーニングが必要。体力・バランスなどベースが持ち上がらないと、いろんな事を教えてもできるようにはなりにくい。
・　体全体、指先など末端の力のコントロールを身に付けるトレーニング
→　指先で力加減をコントロールするゲームの活用（ジェンガなど）
スプーンレース……　運ぶボールをピンポン玉にしたり、ゴルフホールに変えたりする
けん玉……　腕だけでなくひざを使う、力の加減

〈 嶋谷　和之　講師 〉

・　漢字のテスト中、きれいな字が混じるのはなぜだろう？
・　漢字に、止め・角がない。書字のとき、圧力を感じきれていないのでは。
→　紙の抵抗を感じられるよう、下敷きをソフトなものや、ザラザラするものなど変化させてみる。
書道は、止め・はねなど、力の加減を意識しやすい。



・　ダンスの苦手→　次から次に　動きを入りかえる事も苦手そう。
　　自分の体のイメージがつかめない中で、周りを見ながらよくがんばっている。
・　片付けで　物を小さい箱の中に収めることは、どの順番で入れるか、どこにどれを収めるか大きさを見て決めるなど高度な作業　→　順番を考えて動くことが苦手
　　ものの大きさの差が、わかりにくいのかも
　　空間認知の未熟さ
・　力は「強い」と「弱い」だけでなく中間の力があることを習得できると、動きが滑らかになると思う。
・　縄跳びの様子から　→　自分なりに練習をして、体を不器用に使いながら頑張っているので、かなり力んでいる。疲れてくると、反対に力が抜けて、楽にできているようだ。
・　いろんな困難を抱えながら、涙ぐましいほどがんばっている。

●　質疑・応答

Q　画数の多い漢字は覚えにくいのでしょうか　（OT　女性）

A　・　部分を見て全体を見ていない、全体を見て部分が見えてない…2つのことを同時にすることが苦手な子どもが多い。画数の多い・少ないは余り関係ない
　　・　スキルの習得…漢字の書き順や、「ここの線は何本」でなくて、子どもに合った覚えかたを見つけて教える
　　“聞”は門の中に耳などパーツの組立や、意味や、成り立ちとか　　（山田講師）

Q　継次処理の苦手は、どの部分から読み取れるのか　（教員　男性）

A　整理整頓が苦手、漢字の書き順が覚えられないという事から。
　（山田講師）

Q　継次処理はどのようにトレーニングできるか　（教員　男性）

A　・　まずベーストレーニングをして、運動能力などまず上げてから教えたほうが、スムーズに獲得しやすい。
　　・得意な事を伸ばす事は、有効なこともある。得意な事が苦手を引き上げることもあるので、その可能性があればいいと思う。　　（山田講師）

Q　体の使い方が不器用にも関わらず、自転車を乗るのが得意なのはなぜ　（OT　女性）

A　運動の中でも得手不得手がある。筋収縮にも、場所によって差がありそう。
　ダンスなどすばやい身のこなしを求められる運動は苦手でも、自転車はバランス感覚が必要だが、やりながら体の遣いかたを調整していける。
　前庭・固有両方の感覚からの情報を使える運動なので、やりやすいかも
　　（嶋谷講師）

Q　通級学級では頑張れるのに、所属の通常学級では座っていなれないなど問題を起こしてうまくいかない。どうしたら？　　（教員　女性）

A　・　うまくいっている通級学級での取り組みを、通常学級ではやれていない。通級学級ではなぜうまくいくか、関わりかたの違いを比較してみて、通常学級の担任に具体的にアドバイスをする。
　　・　授業の見通しがもてていないのでは？授業1時間の詳しいタイムスケジュールを掲示する
　　・　難しい授業に取り組む前には、通級学級などで　予めわかりやすくなる支援をする
　　・　授業は「自分の授業についてこい」から「どの子にも対応可能」に変わるべき＝ユニバーサルデザイン化の必要　　（山田講師）

【アンケートのまとめ】

回収 41/81

1　参加者の人数・属性

- 参加者数　　81 人　（ 午前　79人 ・ 午後　74 人 ）
- 参加者内訳

(1) 保護者　23人　（「のこのこ」会員　15 人 / その他　8人 ）
(2) 教員　　15 人　（幼稚園・保育所 1人 / 小学校　8 人 / 中学校 1人 / 高等学校 0人 / 養護学校 2人 / 不明 3人 ）
(3) 専門職　19 人　（ DR 2 人 / OT 9 人 / ST 4 人 / CP 3人 / 看護士 / 1人 ）
(4) その他　24 人（通所施設スタッフ 15 人 / 学生 2人 / 塾講師 1人 / 不明 6人 ）

2　企画に対する感想

(1) 講演 1 「発達障害のある子どもの特性に沿ったサポートと教材の活用
～使い方で変わる教材の有効性～」

・とてもわかりやすい内容で、実践できる支援方法を学べた。（保護者）
・子どもの行動の理由を見る目と分析力が必要だと感じた。（保護者）
・漢字の書き取りなど苦手について詳しく聞けて、いろんなサポート教材があることを知ることができた（保護者）
・教材教具を準備する上での実態把握の視点や、つまずきの原因を探る事の大切さを改めて実感した。（養護学級　教諭）
・実際に行なわれている事例を詳しく説明いただき、とても参考になった。（療育施設スタッフ）
・困っている事に早く気がついてあげる事の大切さ、障害の大きさにはかんけいないと思った。（療育施設スタッフ）
・もっと聞きたかった （中学校　教諭）
・読み書きが苦手な子への評価や、支援法の研修会はあまりないので、とても役に立った。（ST）
・教育の具体的な対応を聞くことができ、大変参考になった。（医師）
・闇雲に頑張らせるのでなく、指導する側が重要なポイントをしっかりとらえて取り組ませることが大事だと思った。（ 小学校　教諭 ）
・ベーストレーニングの上に他のトレーニングが成り立つ事を学んだ。（不明）
・ストレスの発散方法を見つけにくい子どもたちも、子どもの特性に合った指導を行なうことが、とても大切だと再認識した。
・支援はいろんな方向から見ることで見え方がかわることを知った。よく知る事から見直そうと思った。（保育士）
・分析の仕方や支援方法などについて、視点の持ちかた、工夫などが大事だと思った。（保育士）

(2) 講演 2 「発達障害のある子どもの感覚運動機能に応じた教材教具の工夫」

・滑り止めシート、人工芝など身近なものを教材として活用できるなど、教材の紹介・工夫を教えていただき、参考になった。時間が足りなかった。（保護者）
・子どもが授業中など、学校生活を頑張っているんだと実感した。 もっとほめてあげようと思います。（不明）
・具体的な生活実践の道具まで紹介していただいて、大変おもしろく聞けた。（OT）
・少し難しかった。（ST）
・子どもの指導のヒントをたくさん得た。（大学生）

・見てわかりにくい子どもの困り感に気付くためにも、感覚統合の支点は重要だと再認識しました。
（小学校　教諭）
・作業療法の視点からの話は、とても参考になった。（大学生）
・子どもに合った教材教具の活用を、個々に考えていく。　（療育スタッフ）
・保護者より箸のトレーニングについてよく尋ねられるので、紹介のあったサポートツールを勧めたい。
（保育士）
・できることを増やすために、達成（感・できた喜びを得られるように、支援方法を工夫したい。
（療育スタッフ）
・正しい分析の必要性を感じた。（不明）

(3)　ワークショップ 「子どもの解答用紙から何を読み取るか？」
・午前中の講義を聞いたので、支援方法を考えることができた。（保護者）
・問題点には気付けたが、具体的な解決方法を考えるのが難しい。（保護者）
・グループ活動で、自分では気付けなかったことを、グループの先生方から聞く事ができ、参考になった。（保護者）
・子どもの特徴をとらえるための見方を学んだことで、多角面から子どもを見ていて必要があると感じた。（小学校　教諭）
・グループワークの時間が短く、意見をまとめるのが難しかったが、発表と先生の総評で、どこに視点を置いてみればよいかわかった。（療育施設スタッフ）
・グループワークは、多方面からの視点でいろんな意見を聞く事ができた。　（養護学級　教諭）
・グループワークで話したように、地域で研修ができるといいと思った。（OT）
・短時間で子どもを評価する仕事なので、限られた手がかりから見立てていく方法を学んだ。（CP）
・現場の先生方、保護者の話を聞く事ができて、よかった。（大学生）
・時間が足りなかった。（小学校　教諭）

3　「特別支援教育」「発達障害者支援法」に望む事、その他意見・感想
・ユニバーサルデザインの授業が、全国のすべての学校に取り入れられることを望む。（保護者）
・このような研修会が、たくさんいろんな場所でしてほしい。　（小学校　教諭）
・未就学児のポイント・情報を知りたい。　（療育スタッフ）
・もっと広く広報してほしい。学校に直接案内をしてもらいたい。　（小学校　教諭）
・様々な分野での連携が大切になってくると思った。（小学校　補助教諭）
・教育との連携が難しいと感じている。山田先生が「診断の有無に関わらず」と何度も繰り返されたのが、心強く思った。　（OT）
・各講演の時間をもう少し長くとってもらいたかった。（OT）
・まだまだ話が聞きたかった。（大学生）
・とてもいい研修会だった。またこんな機会があれば参加したい。（療育スタッフ）

特定非営利活動法人
JPA LD
全国LD親の会

日本財団 The Nippon Foundation 助成事業

サポートツール全国キャラバン２０１２「教材教具研修会」
ｉｎ長崎は、日本財団からの助成金によって実施しました。